
ある日ある晴れた日ひまわり怪奇

返歌分式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日ある晴れた日ひまわり怪奇

【Nコード】

N1523I

【作者名】

返歌分式

【あらすじ】

ある見慣れた日常の中で、一際異彩を放つ物と遭遇してしまった私は、これからどんな行動をとればいいのかだろうか。

「お嬢さん、お嬢さん。ごめんね、お邪魔しちゃってるよ」

「誰……、いや……、何……？」

「私？ 私はひまわり！」

「……………」

ジョウロを片手に、私はどつしよつと悩んだ。

ある見慣れた日常の中で、一際異彩を放つ物と遭遇してしまった私は、これからどんな行動をとればいいのかだろうか。

「お嬢さん、お嬢さん。ごめんね、お邪魔しちゃってるよ」

「誰……、いや……、何……？」

「私？ 私はひまわり！」

「……………」

ジヨウ口を片手に、私はどうしようと悩んだ。

私の日課は、朝起きたらまず自分の朝食を作るよりも先に、庭のひまわり畑に水をやるということから始まる。

リン村から離れた、あまり人が寄り付かないような場所に建てられた木造建築の小屋。それが私の家。

村から離れていたら盗賊達の恰好の餌食だろうと思われがちだが、これが結構盗賊達も来ない。

それは多分私の小屋を守るように、ぐるりと囲むようにして咲くひまわり達のおかげでもある。

このひまわりの迷路を抜け出せるのは今のところ私だけじゃないのかな。いや知らないけど。

親が死んで、その唯一の遺産であるこの小屋とひまわり畑を守って

（守られて）数年。

流石にここまで不可解なことが起きたのは初めてだった。

不可解のこと、というのはつまり、

私の小屋の真ん前、ひまわり畑より少し離れた場所に孤独に咲く、ひまわりの花の部分に人間の口がついたとても不気味な物だった。ひまわりもどきの不気味な物体の口は、笑みをかたどっている。ちなみに人間の口以外はいたって普通の、健康的なひまわりだった。それが尚更、口の部分を強調して気持ちが悪い。

「なんで私のひまわりに変な物が寄生してるの」

「分からない。私にも分からないのだから、お嬢ちゃんに聞かれても答えることはできないよ」

「他のひまわり達から養分吸い取りそうだなあ……引っこ抜いていかなあ……」

「あの、あの、お嬢ちゃん！ 怖いことをボヤかないで！ 一応私は生きているから！ 殺生はいけません。これ世の中の常識」

「どこにスコップあったっけかなあ……ああもうめんどくさい……」

「い、いやあ！ お嬢ちゃん本気だ！ やめてやめてやめて！」

私の家の前に立つ、私よりも背の高いひまわりがゆさゆさと揺れる。それを私は無視して家の中に戻り、壁に立てかけてあった長年使い込んでいるスコップを手取る。

ちなみにこれも私の両親の遺産。柄が木製で土を掬う部分が金属。塗られた色は赤の、二人が生きていた時にどちらも気に入っていたスコップだ。

私には少し重過ぎるスコップを両手に、小屋から出ると、ひまわりもどきが「ひいっ！」と声をあげた。

「うわわわわお嬢ちゃん！ やめてやめて掘らないで！ 掘ったら根が剥きだしになっちゃう！ むきだしになったら虫に食べられちゃう！ だからやめてお願いホントやめて！」

結構年のいった掠れた男の人の声を出すその気持ちの悪い物の意見を聞く気なんて、さらさらない。

せえー、と声を出しスコップの土を掬う部分を地面から垂直に、真上に上げる。

後は、の！ という掛け声で落とすように突き立ててやれば、地面が掘れるだろう。

その時に誤って根まで断つかもしれないが、まあ別にいいんじゃないのかな。

よし、振り下ろそう。そう思い両手から少しだけ力を抜いた。

「わあー！ 待って待って！ お嬢ちゃん君はひまわりを愛しているんだろう？ そのひまわりへの愛を私に」

「の！」

「おあー！！ ぎゃー！！」

ズムツ、と地面にスコップの先が刺さった。
頭上からは「おあー！ おあー！」という声が忙しく繰り返されている。

「人の話聞いてお嬢ちゃん！」

「人？」

「え、うん、人だよ、人。そうだよ人だよ！ 人の話は聞く！ これも常識！」

「せえー……」

「あー！ あー！ あー！」

「の！」

「ア、ア、ー！！！」

悲鳴を上げるひまわりもどきを見捨てて掘り続けると、ガツン、と明らかに金属と金属（それが硬い岩）がぶつかり合う音と手ごたえがあった。

「あ、あ！ お嬢ちゃんダメだって！ それ以上深く掘らないでえええええ！！！」

「なにこれ……宝石？」

ひまわりのわりには太い根が守るようにして絡みついていた物を凝視する。

土を被って汚れてはいるが、それは確かに宝石の原石と呼ばれる代物だった。

血を固めて固めて集結させたようなその赤くて鈍い光を放つそれに、私は首を傾げる。

光ってる？ 太陽の光を跳ね返しているんじゃない？

私はそれを何度か見たことがあった。

色は違えども、確かに同じ物。

それがもし同じ物だったとしたら、もしかしたらこのひまわりは、私のひまわりに寄生している謎の寄生物ではないかもしれない。

「ねえ、あなたもしかして」

「うう……うう……？」

「魔法使い？」

「……………えっ」

ひまわりに引っ付いている口が、驚きのあまり半開きになっている。私はその反応を見て、確信した。

とりあえず私は、自分のひまわり達に寄生した寄生物じゃなくて

良かったと安堵する。

私にとってこのひまわり畑のひまわり達は、家族みたいなものだから。

そのわりには寄生されたであろうひまわりには容赦なかったよね、とかの言葉は聞かない。

もうそこは、「だって他のひまわり達に伝染したら大変でしょ」と言うしかない。

まあそこんそこはおいといて。

さて、と私は見上げていた顔を下にして、もう一回スコップを真上へとあげる。

「え、えええ、お嬢ちゃん！ やめて！」

「問答」

「うわわわわわ！」

「無用！」

「ギャー！！！」

スコップを思いっきり宝石へと落とし割ると、ひまわりもどきがぽふんっ！ という音とともに白い煙みたいなものに包まれる。

突如として噴出された白い煙を手で払い、煙が晴れるのを待った。そして煙が晴れると、ひまわりもどきが根を張っていた部分に、紫色のローブを羽織った、わかりやすい魔法使いが横たわっていた。

「うう……お嬢ちゃん……、ひどいよ……暴力反対……」

「私の家族達に化けた罰よ」

「う、ごめんなさい………」

横たわりながら謝ってくる、体格の良い男。

魔法使いがこんな ^{へんひ} 辺鄙なところに来るだなんて、一体どういう見だろつと問いただしてみれば、魔法使いの男が目を潤ませながら言った。

「実は……食料が尽きて……村に引き返そうとしたらこの周りのひまわり達に邪魔されて……。ひまわり達がこっちに来てこっちに来てって言うし、お腹空いたしで困ってたら小屋が見えて……。お世話になるうとしたらひまわり達に、この小屋の主は人間が嫌いだからひまわりになった方がいいよって言うし………」

私はその魔法使いの言葉に驚いた。

この人、私のひまわり達と会話ができてるんだ。

そして、私から危険を遠ざけてくれるひまわり達がわざわざこの人を呼んだというのなら、この人は悪い人じゃないのかもしれない。むしろ必要な人、と判断されたのか。

……そういえば、この前ひまわり達に声をかけながら歩いているときに、うっかり呟いちゃったつけ。

誰か話相手が欲しい、と。

そこまでは直接的な言葉ではなかったけども、まあ簡単に言えばそんなこと。

うううう言う男の人の腹が盛大な音を立てる。

涙目でこちらを見上げる男の人。

私は人間が嫌いというよりも、苦手だった。

だけでも、こんなお腹を空かせた人をこのまま放置するのも、良心が痛い。

いつもは風に揺られて賑やかにしているひまわり達は、今は沈黙。私と男の人の静かに見守るようになっている。

居たたまれなくなつて周りを見渡しても、私の困惑に答えてくれるひまわりは誰一本としていない。

私はそのことに少し寂しい気持ちになりながらも、諦めの心中だった。

「はあ……しょうがないか……。今から朝食作るから、入ってきて」

「いいのかいお嬢ちゃん！　ありがとうお嬢ちゃん！」

さつきとは打って変わって、勢いよく飛び起きた男の顔を見て私は顔を顰めた。

この男の人、無精ひげが生え放題だ。

なんとなくお父さんを思い出すから嫌だなあ、と思っていると、男の人が期待の眼差しで私を見ていることに気が付いた。

案内するように小屋の中に入れば、男の人は私の後ろに付いてくる。

小屋の中へと消えていく二人を、ひまわり達は風に揺られくすくすと笑いながら見守っていた。

（後書き）

ほのぼの系。

本当はこの後も少し続く予定だったけども、長いしぐどいからきりよく切ってみた。
なかなかいい感じ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1523i/>

ある日ある晴れた日ひまわり怪奇

2010年12月14日03時39分発行